萬葉集代匠記

十四上

和書門 類
八五三六 號
九四 函
六 架
三〇 冊

内閣文庫
和書 類
八五三六 號
三〇 冊
二〇〇 函
一五 架
(一二方)

内閣文庫
番號 和 8536
冊數 30 (23)
函號 200 130

国立公文書館
National Archives of Japan

萬葉集抄第十四上

東歌　あつまうたは五音相通同韻相通をもてしるへし

要なし

なつそひくうなかみかたの

引といふは根なからひくといふ説あれといつれもおほつかなし

剥れをひくといふ説葛をもひくといへり第七に

たちのしりさやに入野に葛ひくわきもまそてもちきせてんとかも葛かるも

第十一

夏葛のたえぬあまるとめに人ひとりやもこれなつかしみ

なつそは葛の流をいふなるへしさくらなとにつくる

なつそとも五音通すれは夏麻引といふにかよへり

日本政府圖書
內閣文庫
明治十年購求

古語拾遺云天富命更求沃壌分阿波齋
部率往東上播殖麻穀好麻所生故謂之
總國穀木所生故謂之結城郡自注云古
語麻謂之總也今為上總下総二國是也
こゝにいはれは上総下総も此所の名にして麻のよろし
きところなれはかくはよみけるなるへし又此哥
前に夏麻ひくうなひをさしてとふ鳥のいたらむとそよ
ことふりしひのはしくるうなかみ海上郡は下総にあり
第九にうなかみのかたをさしてとよめるは下総也第七に
夏麻ひくうなかみかたのおきつすにふねはとゝめむさよ更にけり
かはしらかれまれ
第七に

風ふけは波のうきをとこくふねにくさへくうへしと
筑波根のまひくに降られ
またはやまゆく
兵。眉上蚕 神代紀云時保食神實已死
音象 和名久波万由 桑蚕唐韻云蠁
桑蚕即桑蠶也蠶ハ春宴飼ふにま
川表いしめてかひける蠶のきぬをこそふよ經しこけしハ
日本紀ニ衣裳とさきてはあやにしきなとも称んこそ
まきぬなりしまさく
流くる絲ニ雪ともふれる
始しるはふれるとし いかとうをい いやさふハあらぬうもこし
ゑるしきてみるうハかるしきんゑふるの切るすとるす
ふもいふくろハ東俗はの何やも流けくいふ絹し

小のなきなるもいぬのなせる歌し
うなくれ給ふの
継躰紀云馬来田皇女　天武紀云大伴
連馬来田又云十二年六月丁巳朔巳未
大伴連吹（本ノミ、）多甍これともに此下ニ松ありなかや
ぬれぬくつみれはともぬまてくまれきみはてもぬれて見けるは
とも字ゆたいとふれそもいかんちはこひんれとかやせん
かなるしくさく葉をあるき伊勢とのうりよ秋のはてさく
つけし秋の露よりもとしあるかてらし又ぬまてくつかるこ
とい海をこえ達えれといふりや古書のことはゆくたしうかん

いろくし
う波くされ移ろにかゝりぬ
うまくこのうよ小かくれぬるかゝりハ東信の後のにもあられ
此集ニ相見えかくふれ屋はるて國の見ゆし又見ゆる
いともきこゆ
かハしられてのてこゑを
吉男娘子かことハ弟三十九の卷まろくあなかくしるされ
まよ依さふそ見れはよせていふしいふし八代吉男のてこなれ
名高き紀乃底よ紀人なるを海とゝ小や家とれれてこれよせ
こいふんとし女の斎なりさるかにもよせていふれとし女乃
斎としるかゝりさて今はよれいていふれまへの代なりけるを
かくしそなんと書のむなし

うけしられけるのてこれか

万々の松まひハまされはいひへこさ磯ふあまなし浪も

そろふハ上ふ勝りもろふとひさまくいひへつまな浪乃

舎のまく思ひけるくひさまく人のあはきこし

にかとりれけるつましかいせ

ふ佐ま此川くとしふんふ流けるか流しうと世ハむろのえ

やまとせまといふてこひまえ名をとえてまる稲くふへきともハ田舎ま

ハ田流くる思きやとひきまる人しをあつめくけはやく刈

しる稲ふく撰をとして食をまする日ハ門をとさして人

をいうちへもいまたねとも君かきをつハれとふたしもんやハ

よひこれいまあ也す也下ふ

調乃世尼の戸あれまる流ふなきにつけをとやりていまふ此戸を

此ふなきも撰次ありへしなひふ流へとすれはいまこそ

又家持郡条の前ま

いやもの田刈あけく流へもも君かつひとあふかやうし

とあり

あの音世にゆん二届りる

河の音ハあし此音之まれ足をとゝしのふまうとまふひて松や

せさうん鈴もうくし禄のふゝまゝれ流さかしいされをとうまう

てうまふ流まうつきくやまれまハんのんふいふり

流くる稲の稲乃小雲ノ森

さそては穐波根まかる霞のこれやしね小珠かあまりとり

をうねるをかゝてこうり　あ稲くやうさをいいまくやまてとく

る稲氏とかまるハ東前ふく熟ま糟席あまあへありるへし

此哥ハ女のりかたにをとこ此事ありしかはいひもひく外に立なか
らえあ絶やしねを加へ他の女うちのろんしあらわれみてよひ
いまさくい孫てやまてよわかふや
妹かかといやとをかれきね
ほとしき序のきぬくれて八撫りてれハ振てんたりつられて
久ろをとこ此哥くし
流くそ子ふかれくもし此
第九の哥ふもつしの伝流くそれ山をいふかくろくハ
和名集云嚇 呼格反 加加奈久 荘子云於是鴟得
腐鼠鵷雛過之仰而視之曰嚇 文選鮑
明遠蕪城賦云 鴟嚇 鳥のえさをとむ時とこち
もりつくろふまかつくとひふ嚇カ雛ニといふ

もちしえつる鴟のわれひろのあましかりてえをこふとう
るきく学ひくいさうやうふおくといへり
流くそ子ふれひふゆかあしかな山
流くそ山とあれは山といつりせ山のやうにさしむかひてそれ
むきくへゆまいれをよわくなく何ゆふへあしん家をとう
営をやうよありくとむゆへぬ時あしか山といふをうけてあかく
あかとそうもうきまうてふ河の山れれむきてに有うしいふく
わうをうといちきりをたうふうやくれんを きえうれくふハ
まうとにえてうくほく此条の山岌の
兄妹をいつちゆあし山岌れうひよ称しく今もくやしも
今此哥のれうひもこのんてし
流くそ子れ岩もころふ

みなハつゝの流るゝ事よりいふ事もしられさておつる水の代
を人々もたつねしく君もさんやうにつき忘れぬとて おほる
おもひ添へ古今集よりつくりひえの山なる松とそれ毎程を
よめる
筑波根と云ハつくはね同雲ハよそを廻く おほるゝみなれ前々る
陽成院の流るゝ事ののち孫より おほる みなの川にあり御製な
今此哥をつくらあはれし つらなりや又古今集にてあり
流る孫のいへもしらぬ也てる日かもこの神ひかやうにあはすて
よまり
流るゝ孫のをてもこのまに
をちもこれも又少しもおもふれおそもこのりとあり ありし
小山ありて又男十八まも

やきうちなみの其外のを程よ わきよりいとりく人やりけく君とそなん
をよありそこうこれもいかせ一丹子とりれむなし 山ありわかにたえ
とるをもつこんのあひ能ハ又男十二不
玉あへいたひぬるそのを小山田の本田りことをつくしよりま
又母こうれもい母飯隠ふくはら妙記祢やふとあわく雪
ありへし
流ころものを流るゝ孫なれ
衣まをて流るゝのふかま流けあり ゆきてるとはこれハつ
すれてきよくいこれ又おわりけむえあいなんちをへてみけ
もありあるり
と川くまれ稲なまつくなし
月立し月の家に出るとし あひさよいせ流りお本にいへくあひ

くまりいふり今撰進ある歌いくさかこそのりぬる世流布のおほよ
云おほくありぬるを之 今萬葉集なるさなれぬるを之 されは
よる川に付ていふことまゝあるはなをさとられてあるかく
まもなくつかうたる文にはむかしもいふ人あひて続きんなもし
を作くされしけおことの方に
木の葉よりなりぬるゆかたをとらんはめかりかるむちをみんし
まよ歌ありくまいこれ常なる奇なくいさよるにあるねとのふんの
されは今はいはゆるさかるといふもいふ之歌第一の二千九百首弁三くさ
四千七百首弁也十五巻弁十二巻二十二巻にいけてふたとは有上
にもすくなくて注せるもしけきこのなかしたるれぬゆかたをとらん
とは志けきこれ乃よりたるはいさしるにもみえんたるたるれはへ
くもつんねんを

ひろきみちなるはりみちの御代
わたくしかしこく
まことそれのことはいひしるも
されしるなハ埴科郡之石井の手児といふ川かはれはたをいへるな
るへし世流ゝ撰ミにまよふの娘なりたとひよみてつかはしたれとも和俊
あられはあやしきつかふはれ上をいへり
信濃路ハいまの墾道
今あらたに作りたる道也巻十四にみえたり此今作る道と
あるにはあへしかりそめにより埴をかへるなるへし今も田舎
此土あらくいかつらくかきくさけれとされは沼のうちつちの
まくろなる之されは今作る道はなにもうちあ給はみえことゑ
て足もとも御事ハきるみちをあゆしてぬこてなきされく

川ぞひてつく周意してことまきに上流の柳にかゝる又ハ刈る
草木の根の絡まることかゝりしそれハいふえれて侍らん
信濃なるちくまかはの
彼歌ニ萬葉歌ありさゞれしハ細石きみしふみてハ
玉ともひろはむとハ君かふみたまはゞさゞれ石とても玉
として尊とひろはむひろはんとなり第十四にあり
さゞれ川のさゞれ石つゞきたりとあり
中山より越る事
なかやまハところの名なるへしこれよりて信濃の国の
ときこえなれゝし
ひのくれのうすひの山を
第二十防人か歌にハひなくもりうすひの坂とよめり
かれハ日のくもりて白らけのうすきんにつけたりそれハ白れ
くもる時に光のうすきによて和名集にハ碓氷郡とかき
日本紀にハ碓日坂とかけりさやにぬかしつきさやかにふり
はく
ありこひえ方侍りもうるし
まさらもりれしとハさしわたりしるところも切に思ひつゞくなり
草枕なるこのいふ程と侍りけり旅ハ野にふせ草を枕としてぬる
ゆゑにかくつけたりとぞ今案するにふるくつけあるきこの
川につけけるハ眠るとのふんにつけけれハ今もたりしひと
つを旅のかりに草まくらて旅と侍りけるなるへしおふもかな
しもえれくもられし都え布と名を同韻なくて通とう
りし文ハ久の字のあやまれるたこのいたりけとのへハ奥ふ

うき瀬ときこゆるは公のうたへとにとにされ人を訴んこゝろに

ぞよめりけるにかくいはあり　多胡は上野にある郡の名なり

和名集云多胡(胡音如呉)郡續日本紀才五元

明紀云和銅三年三月(辛亥)割上野國甘良

郡織裳韓級矢田大家緑野郡武美片岡

郡山等六之郷立多胡郡

かみつけのあそのまそむら

まそむらは真麻村也　かきむだきは抱し真麻を刈りてた

ばねてかきいだくごとく妹をいだきてぬるよし也下野に

安蘇郡あれどこゝは上野なれば是にはあらぬ也

欽明紀云凋吉土伊企儺○由是殺其子

舅子亦抱其父而死秘府論七言三平聲

例書句云相抱長眠不須起　あやまちはゆるせん

といふことわきんなり古今集に

んとこうりけれどのこと思ひねる身とのかゝや恋しかるべき

こそあり

かみつけのをとのたとりか

或本にはをのゝたどりか　あはぢともあそちもかをちふく

河路とをのは緑野郡和名集小野郷に出たり登と能と

同韻なれはをどとの通するなりたどりも川の名にやこゝろはあ

またもはあはなんなり

かみつけのさのくゝたち

和名集云唐韻云蔓(音豐 和名久久太知 俗用莖立二字)蔓

菁苗也　拾遺集物名　くゝたち　まけこ

山さくら花の色をもつゝめるにくらへぬるかみもかね
あまつかせ雲のかよひち我かよふらんとて光そやしいふへきやとりて
そやされしといふ事にし出来たる事も其年まても猶そまま
ふをハさのくにちをおもひりそやして君をもてなさん
ことし第十一に
かくやひめのかたそおほつかなくてそやし事にかゝりそ君をしまさん
ことなり
かくつけれはこそいはし乃となり
第十三に
姫君をかゝやくはかりと申しひかりすらいてらしもし
となり日本紀にかゝやくはしひめとかけり眼妙姫とかかり十三
にも同御かたち清らにて姫君の光かゝやくはかりかゝやきてさらにと
のかゝやくはかりなりしを
遊仙窟曰雲母餝窻玲
瓏映日　文選宋玉神女賦序云其始来
也耀乎若白日初出照屋梁○詳而視之
奪人目精まかゝやくはかりしもかゝやくはかりなるを姫君のまへにゆ
かしまり元向はぬてらしてもありしてうれそかゝやきてりかく
やくやうきとも人の瀬明とかくてらひて月小嫌はしきてとあふ
かく神武紀に眩の字をかきててとあるはこれはまかへし
上魏とのひて紙をも御をもいかそまくいふ宮とかいふあり
玉の台へ竹垣とのつゝみひこありつゝこれは第十三も
かくしれれは小おもひたる行先の花のすゝ有りつりあり流てられて
となり
小ひら山根にはつりたるか

彼上に新田郡あり称すはつらねくは山領にハ浪くたなるなり
上のかハ莫るり下のかハ行くる字してれはよりハ田られに
まろりこそよりまハよるこし其田にかすけの山への道ともそ
アれくともよ時下まいさよふ雲のまろり法まハもとまあり
はしたるハみしこたなこし前のかんハ新田山の根に雲の流ら
ねくことも人の弓ふ法さまりて乎川されてよれにこんをよ
せうく叙のあへきんとするをとこふも法られしてハしくならむ
みく所てるら称んとろふるしきとてなし乎かも止とあ
をおほと海をなしふおけまとよりて古今集云陸奥内親王
のなしふりらそハたりぬへらたりとよませて海ともみな
なしとこし
いかろふあまる雲いつき

延喜式云群馬郡伊加保神社名神大是れハ
いかほの沼も群馬郡之東俗のことハ沼名お屋りれハ保れ
字守善のことくふいひり あま雲ハ天雲としいつきハいそ
発語のことハつきハ継て飛るし かね乃川くハ被甚明る
へくさこゆるし下ふいひりとく
いれ又ふいひ伊香保ねま川く人よりおさいふいひねしめとり
たか根よ雲れ法くのまよれさなふ君にはつきらうくたか根よもひく
ひくくおさいふ今川りまで前ふ人れおさなふとあまハ人れのとま
ふるるへしいひねしめともいいさ宮腹しあらしくらいろとれ
なしく御るる河し寺各書ふ山上憶良の子をうしるへる
時の歌奇に
久法くの世の人にまたれハいひねよとまをく例さいり

とはあま雲はいづくの山に継て立とも彼家に伝て泥依
人はいと寂しからましのさまふといへるなるべし

いりかるれはひのかけり原

おもは此二句ありてひは傍に川なひ柳なともいふものしき山
の姐といふも山すそなひてかくれたるを紛やかれ雨をいへるとおほ
なしむといふなるへし萩原は榛といふ木のしけきをいふ桜こゝ
の稀りしを根にいたりして流るゝ所にしおくくとかゝるをいふ折
すゑをみつけれとこし まことしかりて濃きしよくはこしまさ
ろはさしあたりさるかをいひてよくまさりしもかたし思ふもかた
しのといへるこれにさしあたりさる秋のまことわりて
なのもしれを乗て志かねゆくまゝ忍をいふなんとかよそう
さる人はんのやまと紀にもする思ふなれは福に序にもよう
おとろかしひろれとかれもあはれてきくかふへきさるまかれそ
このうきは世の挊しへともなかりねへし

たこのねふよ結つかいへて

此前は下の句んなかなき前にこゝろふに入せは あまくやし
つのはあにこんやしつのこしつは半十下に新室の御しり
けことといふるかなし容儀沈静なるをかしるこしたのかはよ
理に上句にあるせよく見事に彼鹿者吉なといふことを妍に
といひるせるれよふにあそはまけるをあかれくもあやしと
よある作意を思ふへし 上の句なは常綱にも今も大概は
綱にて綱を結く張よりしといへとかれはひなるへし絶てる
男を女れしのひて男を廉につきへて世つるいへて廉を人ら
まくするも絶たる人の今は豈来郎になやかにしてその沿

よりしやといへるんときこゆあはくやとといふ句に斯豆之
は志河のこと今はあり志河しも続へし流しといふんこし上
にうたるまじつとといふ句を尺としうてとし今案あはくや
し河のれなりは紀にとはあはくやはあふこんやこ志河は東俗
の俗に廉をいふれはまくまこれ志河といへるは隈を廉と
いふにやとおもゆ志からはそのうへは絶えは其皮吉といふをか
はすれはいひうせるたるへし廉の波は第十六にもあり波は
そこの波はとありかのこまてるるとあるもこれなる意は
うらはしきらふたしかなこ
かくはけのくろかれ稲ろの
久愛 葉我多八首紫方にて示の名あるへしこれはいや
をさろりくろとはけさり第二に人丸の哥にもふつつの

のう這しくれそとも第九にもふつくれおのかむきくし出雲の
別しゆけそともあるてくし首のろひゆきてをさかくまり
にせまあへし又々の首紫のこれはたりしろきあそれにをう
あしきこてとかせくつけるも何るへし古今集にはたか
てうるもとまある哥は猶のまれ称りしろきをいへるなり
こ称かはのかくせもしれ
上野に利根郡ありてそこは大河ありてつらりはたちよ
いつるこ浪にあふのそは浪にあふるにし日本紀に如五月
蠅とかきてさはへなすとかるもあわすし浪にあふてく河
魚る君かきていたなき浪にあふてく又君かもあれろしく
あふてとこ称やころかつこれ人あをとこのひとくあれなしをいへ
文人りしれよきふも杦ろうしんあるへし

いかなれやさゝのみそに

やさゝのみそも雨の名なるへし たつのしは起虹と水ある所

よりよく虹はたつ 遊仙窟云梅梁桂棟疑

飲潤長虹 三躰詩祖詠汝墳別業詩虹蜺

出澗雲注筆談曰世傳虹蜺入溪澗飲水

信然 あめいろますとも河のみなもとをはなれて

いて祢にはねては何をたち出りんし虹のかりによせてあれふ

そのあかいろしをたちへてなきひ引ふあるゝ雨まくらもん

をあらせし祢ふねにうつてと云て

かくつ意のいかのねかたに馳小水葱

弟三子も春雨降られさとふらるこたれしもありこるき

かえ花をきねにまうりともあまへいふるはしきものみして女り

なしかしなみをもとむるをみなのへとくはりしていかくえてし

かるしとみつるんをかくことひんとそのゐるしけりしとひなるゝ

かくは雨ぬるかやらねかたの

いそのつるはよは

いりもちれ春月やうつるのいそのつるひみぬるつけれたれるか

すへく雨ときとくるれ哥のんはあれしあ我ゆへて祢はつれを

みゆるれと

かくはけれいかなるのねまれ

ねぎのくさは 和名集云唐韻云莞 音完一音丸 漢語抄云於

保井 可以為席者也 日本紀に莞子とかきてかま

とよまれは今おはかくさも蒲とや大藺といふなりな

はけるなゝへしかれやしよるとよれとも伝みつへしより

いこ渡ふ出てるおほおをかりまして席ふおくそ哉みとある
をよれよこし人をとまえ今くこるが根万侍るとしふこことくさ
アほふ人丸の集ふ出をいふ穴おもれ此書ふこ近をとゑしめく
あ首の人をうこれらめりて名ふまたしらふ人丸の哥といえ
すして人丸集ふ出といへるは彼能臣の家隆くふる中ふん侍
へるといつかなしねとも集此中ふ載てお通るなりへし
それを古今此万ふたくひろき御哉なれは京の不さんとて撰
者も泥しあるこ又御哉なけ通は彼能臣集ラ属
すなるへし

かみつ家のきれさのたんの
八雲ほおよはや田とよ世の人もさおくてさちともはのく
再えしとまあるるおほしあるれて作今のなのまくよ

むとを正義ときと尾しむつたへは苗のおほきんそし村草村竹
とつふとこしことそえさきや川とは苗代そぬしくのさくさ
まるかきつりあ通いれのしくまるおりふ人のなも子細るさるのぬ
しを約して定つ通え今いいふことかせんとるけくへし

いろはせよたろくしけよ
いろはよあるせれとも呼ひけていつ出才二字ふ常陸の出此信
人の哥よ

久目家波々佐氣久阿利麻氏
とよあるも久慈郡よある母をこしらはとしいへるよおもし
かりくしけふは常可中次下とかけアをきしき気ふ思ふ
といふとこしとかりり呂ふ東哥ふくまは跳ゆえふ清へき
を濁を濁る人きをとまあり下の字此下よ爾の字なしとの

舩ならへし此ぬにはなと清家にして皆ことはのまゝなり
みゆる例なれとおもひとるはふるき倍の助字そ
雖思なりくまこれ清とは世流の所にくまは思ひの
くまさし思ふんのかくれてうらりしき所をもくまさ
ふかうき気に思ふんにまこしくまは皆こもといかうしこ
と清せれと雖思といひて人なをすれしなりともといふそん
たゝ上を思ふくとのなんふいたくくまこれしつものんか
すかへし今案くまは田舎のまゝには山をやかるか第十六線
岩のまよみしそれくまなのやうなるもはしそのくま地
さかやにしもありこれ桜山舩海といふ心ふく清けまて
仁徳紀ニ集隼別皇子雌鳥皇女を率て免田素珥山を
こえのくる時の哥

あしそれはしきも山も吾妹子とかくりと越まいやむしろも
此御哥ふよりくる思ふふかくあそのくま路といふはしをた
つるゆかしの路山といふ心に清くよみやこりいとれなるへし清
いこてあるへし上にあまくやしつのといふふ今案をとくいへし
かきく之と郡と五音の通ふれは須と都と同韻の字にて
音く通あかし志れくまこれしつなり山様を廉にて
るすれはすましせなるもいはすれなれくふうく
し山とすとはくすれぬといは君か山猿にこえていかすう
を山と猿廉をつかへてもしにえすれぬかやいふをうとい
へるは女はところを急てうる敏にいへるなり
かうつけれさねて気れらし
詩大明曰造舟為梁　晦庵註曰造作梁

橋也作船於水比之而加版於其上以通
行者即今之浮橋也傳曰天子造舟諸侯
維舟大夫方舟士特舟張子曰造舟為梁
文王所制而周世遂以為天子之禮也文
選東都賦辟雍詩曰造舟為梁 これハされハ人
ハいつはうきるかゝるなり此哥ハふねの紀州に物語あり是流る
續古林良材集の云これハ父母のゆるさぬ中を每
とふてあるを舟橋にとりなしかけてよめるより作り出して中
まて作り合たるをよせて女のたゝひにかけて見あはすとす
ら人ハ中をはなさけるなり橋の中をとりはなしてあるにかゝれん
とりくなるよりある哥ハよりて親のゆるしもなくてあふハ
さられぬまれをさしすへし此哥ハいかゝ

我か川なかま人ハさしれて船かけとしてくれをつなきかけるなる人
こまゐに那つ哥人保る所よ
ねきせ川のきしぬやさか田やかてくふめるなら秋ハたてゝをやさきハ浮き
後撰集の参議等の所の哥ハまその哥をよめるとみえたり
東海ゆきの名ゝかけてのをおりひとつ名をおもふ人の為め
天武紀上云辛亥男依等到瀬田時大友
皇子及群臣等共営於橋西而大成陣。
仍切断橋中須容三丈置一長板設有踏
板度者乃引板將墮是以不得進襲
いつ渡補をおなし神なつまとね
すゝぶをつけの家にこゝ又つかい上ふをハみくにさる名のうへて
ゆゑハなけきハ板ハみはきれてもまた神のおなしふも何のあれ

る人さきゆゑにみなけ達とも女はことのおもむきゆゑのなれはいさゝか
ますりきはいろくなりけれともいふれことし於是策に神しろ
たりゆかりあるものに宣耀殿の御かたに给はりける

天暦御製

君とのみおもひやりつゝ神よりもこゝろのまゝにつけしかな

とあり

いにしへ風かくて日かはね日
いにし風はいにしへの歌よりけるなみ風俗風明日香風
河原風などはあるとはいひつかくしものりなときこえたりつね
ところ今さまよりそれ風立田風とてはよきかるしけやかに
我もふ人もいはりけれおほなる浦吹風のやむはるなれ

古今集かゝ

すゝかなるたこの浦浪かねてはあれとも君とこひわたるかし

とあり

かくつ花のいにしへの梅なふ
ふみまきのはふるゆきのへ行色そねさわさるねし上の
まつをつけていつりかそねは猶の字つけたりしれ
あまりけれかもの山れ
こひすれはすいは小楠成しちひさきたるのもれ给やうかしけ
あるかまりへて侍りしころそといひつこれをいふにすとし
なをしなかけるりしさんは高くも方にんくこれをまたくさく
待つ人とおもひやるさしまきもりしんにても有ト高野山
と数むんかくをことをいりけり君は侍りきたるひと
またひてしかまんそこゝろへのこのまゝいつとふこゝら今

いひける男ありけりつゝんとおもひつゝけて思ひやるとし
下野にありけるよ
あれのかいよりし下野にあ藍麻ありなるにまかれ京ゆと
きぬよいふんをふまれて京よりおもかるとし十二十二まこと
たえるりつらいかもとかあかんことに陸より　ねうき
こゝろのまゝ海からされを思ふんを陸けよされを海を思ひてん
京やゆくこしとてかへし
あひは稀のくふをさしとかし
さいれへてる字ふく水を思ほえしあひは麁く会津山之陸撰
集ふ
君をのこゝろの里へゆく兵のとあひつの山たかけさゝや名りけり
あひは稀中と陸くにあれ会津郡のまよゝ物てあひつ稀

のこゝりて中をきとてあらはれんくへしは中とはいふなりけりの油
渉なれとおもしいふやうにふうへし志のひよせんとひとむすもし
さ稀はむすへし
陸よしらる陸のふこゆゑよ
はかふは鞄の字をかけり今の倍志かしきとはいふなりちゝし
かゝりをとめいかゝりは衣の名にやはきさんくえにかゝりをおりめを
いふ衣　和名集云毛詩注云綃 所交反又消 和名加止利
鎌也　かなすよひ係称なるさくおかるあかとあり比家
は陸人れんをかすよいかしけり女の陸人の陸にてよいかりて絢を
よへくかるさふゝかさん出来するをきすてらゝみてよる
なりへし
あさらの稀よかほしれ

逢ひても、ありしても後も々哀れハいふまでもなしハ歌ハいふまでもなし
し楽しからすうれしき事ハ楽しところをたゞへて侍るすしてをも中
のところにあまりし哀ハおもひしところに七夜にもなりてハいへハ
侍らんをもゝせ侍られ
こゝはつゐてしいかさまなりしての
彼是よ川伝歌あり下句ハ歌にてのあはれにてあるさまなし
ものをもしろしと思ひてしも忘れはみちひきおもひてみるさまあさ
はかなさをもしハ彼をこの人のおもひをつけかたき哥にゆかり
志され箱をあはれとく身ハ
駿河にする志太歌あり　よしなきことをめかしまとい
ゆゑなしまハこりしてし古流のすゑかくてハこりしと注
せりかしこさすましあはれ世にこそすゑんこゝあせてゆかり

おもしろく聞きして出る舟もおのゝゆゑあれハこれおもしろ
きそのさくさまもたゝうつりてへありんとゆゑにして
いさゝかそれといふ歌なしへし
ありあけのわかれの山
ひとふる見ハ月舟にしおもひしもなさおもひしめてみ
くおりハ舟の櫓をいそりてこゝにさらにいくふかた
あさ中なり
歌のこゝろハあれはてめんあとはしたのゝやことふこゝろのこゝろ
こゝ通ふ人のこゝろあさいふへきをめの字を略せり常にもいふ
よそにし哥のんいあきらか山のふりしは海ならくかれし山へ
よせんとも月舟にこれをひしむるてくこそなくなり
をふさらもこゝにおりてこそたゆみかんとはひしもなきひ

しめまみかくいろくてひろきやと称ふ名も皆ゆと
うれを出處ハ子ろ方ゆと名けり又ひきふ子とゆく
るハ舟本をつりく舟とのそいふりや上宗是摘山ト舟
本さりりもおしうる小舟ともいわり
あしかれまをとうけ山の
これも名せふる川と法くへきを弟十宗名せ神ふる川と
しあるしくあしかりれろけ山なりをとりしれたる称え哉とう
け山とふ名まをとりをみてくいふるなる本かり川の木ハ数の木之捏
なしハ可知の木あるひハ可豆の木とふへし可児の本と
かきうれとつとし滴ありよりてかちの木ことハふとしつを
かうさひとハ見れハかつしさ称んしかつさらすこもハ花のこ
なしにこれめのひくしるをも法くとふうりれとさらすとも

いふハ女のまさをとあるうまふ上へ毎りつかめるたふなと云て
もまありかまあしくま山のゆつる采りまくし人毎りも今此之
ゆ川の名川ハかつの木をかへしていふへし
たきこ淀ら海て山の
薪をおほ德といひけるこ此山にあるをちたきてきるふハあ
らさるへしとてる木ハ枝のこ道さるるこ背之小门部王の东
市中樹とよまれたる哥ふもひんりし此帝のうゑ本此とこ
るまてとのふ常ふもこのうれとの枝なくなれるとこゝろなと
るるとやありまつとたるいそいさ枝と称ことかのく称と
なんおろへをいつるこをとる枝も枝の葉る道ハむさしくまわ
んこてる木をといつり
かく法けのあう山法くら

あさかきてきんハおほせら絶んてかよ召せられてみ給ひき
こなたへつゝとよみたる哥のみく
いかなるかひのありつゝ
上にも此二句あり　浪きよしとしりよハ浪きよしゝめよみく
きぬまよひつけよのなくたて下とおりへハとよハ入て思ひたるあり
さへハゆきをとひねの字細の字をよミて入ていふも白きいろ
の入るなりいふてみへくりよく此集の古注をつくそへんを
浪くへしさられハ君かこてこふらんれを白きさねのまくをあへなる
とおもひてゆきさねハこよくろ川のみちをとうこれハそうりかりれ
きぬのをくれをふへく思ひしめまヽし
さて後ふをれひさ山れ
せ流の神ふ此さてとかせて思ふハいふミふけるはまへかすと

いり海そにしられてころ今案をあくて佐によ珠亜す
ねとつけるにやをとふ毛さ山ハ小新田山て上野ヨ新田郡之
すなる山ハ其の名ふありけむをふ新田山を山そすへてあれハ之
歌十三ふよりろハ人のとなる山とよあからさしりてされせん
かうしろ迦ハ本も草も末の府てせよりハあるよらすよ今
ひろ川のみをとしこゝのまつけにて入てすしとこてふもかすもハ常陸
まかなうり常ふ絶えていふハ常盤のところてこれハ然ふとみへ
ぬをといふ歌六ま
なちなるハ寒さ入なる人の様ふき枝ふ雨れあけと雨しら絶えてのま
此哥につきてく書ありて新田山の木れ常様なる松杉などの
よくちふ中をまけてられなかしたしつくし
みちのくれあたら万ゆく

第七にもあつさ弓ゆくとあり あつさ弓はその名なとより
出たるにけしき無え弾無し弓弦の断なるこし 添えし
めきなるくたるしめきよりたわしし弦のたゆまいなんく
戦に策云弓撥矢約 撥弓交也 つるそふめかもい弦をけ也
かもし第二にもあつさ弓つるをとりそけとあり前也ん
いてひ給ふる中のをもきそへてなゐめるとよ自ら捕と
川よ後へきやうやいまてはふなくれをを弓弦のよくなりく
れてし並ぬるいは又弦のそけてて秋りて人へるく
清むの聲に遊ふる音也ゆ
清むの聲はいつまでの事と志てれおもふ此前より絶にいりてまよ
ある名所いありところつましひくらあるし絶ていりて當前
羽束乃勃か坐山川之名也と清せる也くなるし

すゑの音は絃の音なりかむしらは其の名なるへしとのは東に
まそ鏡あるへきとは承しいひなるいなくし なかちしは日本紀
ま仲の字をなかちとよめり子二人ある中をなかちといふ
しは御絃之 とすりあてしもは磨鶴すりしなり第一
第十九丁廣田麿獵とかけり或本つくこいふこころ上
古弦於道をかりしこそし
すゝれをゆまくる弦やの
をゆまは早馬也日本紀に驛の字をよみしとあり伊と由
と通あれはをゆまはひまひ川なくをゆまむとやいふ字綱の趣
なり獣絃とて絃をさしてあかられは絃の音乃うなさとつけ
より第十丁ま獣絃に川身なしとある前に注せり
令義解第八廐牧令云凡諸道の

さゝら井ハ古流に於て堀井にて池水なて細川細き
川のなをいふ常小井といへ小川の名なりといふ
下句ハ水をたまられる妹かませし絶えまりといふん源氏
とのかりにかうせやといふこともあり彼物をとりへたる
なれハ息を絶んなふかなをこひてのむなり
此ハ錦れあらぬ
女道もあれもハ海も家もし我ハあしふをいるれとも共ふ
立並くあらふこよりく若菜ハいふふ物にあれハ手世を
有てあとハいつりいてこたるハいてとりんふそいて
そ見ゆるんとしこ道ハ伊勢物語にむしたなりつこ
らひしきる人のこゝも井のとこにあくあれひりなを於と
為ふ於かりれハをとこ女もなかりして女いたのをとこと在

思ひつねやのあくみれともきこてらん有りなとかりる一段
にちくてちり紀家のひすめんれれしけるかおなる何に
若菜あらふを見く我もおなしく若菜をあらへいことにまれ
なしくこせのよらひをおもしく紀よりひかれていてあれ
子をとられにあまりへくと女れ家にあらふ哥しいてハ允恭紀
に歴名とかけて志ひて物をこふこともとし此条にハ只いもの
字をいてとまあり又欲得ともかけて
清とかくのくもおにとゆる
まと深くハ間をこいもの人ハ妹か家に
あ清に此てとのよひ清か
此哥たるしひに下れ
あつまち此てこのよひさり越ていなハ何道ハこひん於渡ハあハぬともに

此言ハ駿河国風土記ニ異説ありて神の前を書出處ハ
続歌林良材集ニかけて富士ニ有けるいふ木山ニてあさき
ませといふ歌ハ此神の女神のうたといひつたへてこのよ
ひ坂ハ駿河国にこの集にいはく神の歌にもあらされ東の
歌なりといひ通の国々の歌にも定めかたし宗武卿家集云

うしもろくわつゆくみちに
うしもろくハ何んもろしといふんて富士ニはそこれひ
人の夜れうしもろくしもうしもたくいあし君ゆゑと
もよミ富士ニよ
はかりうたのこゝ人ようしもたくねそあるへハ
まよあることかめへし。

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan